

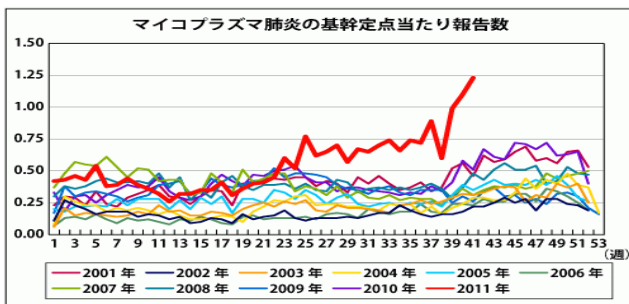
## ただ今流行中、マイコプラズマ肺炎とは

「小児クリニックたまなは」は、お蔭様で12月3日に満18歳になりました。平成5年に浦添市宮城で開業し、平成16年に当地に新築移転しました。移転当時は空地も目立ちましたが、ここ数年でアパートやマンションが立ち並び人口も徐々に増えてきたと実感しています。

そこで来年（平成24年）4月には目と鼻の先に「天久小学校」が開校します。保育園・幼稚園が一体となった500人規模の小学校です。増々、子ども達が増えて明るい地域になると期待すると共に、当クリニックも微力ながら地域にお役に立てるよう努力していく所存です。

さて、最近発熱と咳で来院する患者さんが多くなりました。マイコプラズマ肺炎（感染症）の子が園や学校にいると言うので診断のために血液検査を行う回数も多くなっています。

マイコプラズマは細菌とウィルスの中間の大きさを持つ病原体です。ウィルスと異なり増殖に生きた細胞を必要とせず、しかし細菌の特徴である細胞壁がありません。よく使われるペニシリン系やセフェム系（セフゾン・フロモックス・メイアクトなど）の抗生剤は細胞壁を障害して殺菌しますが、マイコプラズマには無効です。有効なのはタンパク合成阻害剤のマクロライド系（クラリス・ジスロマックなど）の抗生剤です。従って、一部の抗生剤が有効なのでマイコプラズマは細菌に分類されています。



国立感染症研究所感染症情報センターの発表を基に編集部で作成

マイコプラズマの流行はオリンピックイヤーに（4年に1度の周期）と言われていましたが、

最近では毎年秋から春に流行しています。特に今年は大流行する（している）年のようにです。

好発年齢は学童期ですが、幼児期、大人でもかかります。感染様式は飛沫感染と接触感染ですが比較的感染力は弱いです。潜伏期間は2~3週間で、初発症状は発熱、全身倦怠感、頭痛などです。その3~5日後から咳が発症し徐々に強くなり、解熱後も乾いた咳が頑固に3~4週間ほど続きます。

喘息様気管支炎になることがあり、急性期には40%で喘鳴があります。しかし、マイコプラズマ肺炎は肺炎にしては元気で一般状態も悪くないので「異型肺炎」と言われています。その他中耳炎、脳髄膜炎、肝炎、心筋炎など合併症は多彩です。

咳発作は強いが、聴診上ほとんど雑音を認めない場合には、時として異常陰影を認めることがあるので胸部レントゲン撮影が欠かせません。確定診断には、咽頭拭い液や喀痰の培養がありますが、早くても2週間ほどかかりますので有用ではありません。臨床の場では血液検査の粒子凝集法（PA）と酵素抗体法によるIgM抗体検査がありますが、偽陰性（実際かかっているが検査では陰性となる）や偽陽性（かかっていないのに陽性とでる）が多くまだ改良の余地がありそうです。

治療はマクロライド系の抗生剤（1~2週間）を使用しますが、家庭では部屋を暖かくし、加湿器などで十分加湿をして下さい。（50%以上）また特別な予防方法はありませんが、手洗い、うがいと患者と濃厚な接触を避けることです。

登園・登校については、咳症状が改善し全身状態が良いのであればOKです。

（たまなは）